

工学部開設50周年

2学科から4学科体制へ 科学技術の発展とともに



1962(昭和37)年、北海短期大学土木科1部、2部を開設。これが工学部の前身となる



工学部長・教授
魚住 純

北海学園大学の工学部は、1968年に土木工学科と建築学科の2学科からなる学部として開設されました。それから19年を経て電子情報工学科が、さらに25年を経て生命工学科が新設となり、土木工学科から社会環境工学科への名称変更も経て、現在の4学科体制へと発展してきました。

開設50周年を祝う今年度、発行している工学部研究報告を50周年記念特集号とするものです。現在編集作業が

工学部では3つの事業を計画しました。一つは、工学部発足時の2学科に関わる技術である社会インフラと住

伝統を礎に次なる50年へ

さて、工学部は、北海学園大学開設の1952年から16年を経て誕生しています。しかし、記念特集号の記事に

工学部50周年記念講演

10月19日、工学部3A教室において、東京工業大学名誉教授・日本学術振興会JSPS北京研究連絡センター長の廣田薫先生をお招きし、工学部50周年記念講演会が開催された。



東京工業大学名誉教授・日本学術振興会JSPS北京研究連絡センター長 廣田 薫先生

日本科学技術の空洞化を懸念

廣田先生は3年前から中国で研究されており、前半は中国の科学技術の躍進を紹介。中国は国をあげて「科学技術強国」を掲げ、2015年には研究費の総額が年間40兆円を突破し、アメリカに迫っている。さらに、中国政府は豊富な資金力で優秀な人

材を海外から呼び寄せる、通称「1000人計画」プロジェクトを8年前から実施し、述べ70000人もの研究者を集めたといわれている。廣田先生は、日本の科学技術の空洞化を懸念し、「日本は、次の時代を担う若手研究者を育てる環境づくりが必要」と指摘した。

後半は、廣田先生の最新の研究である「マルチエージェントスマート社会のロボットと人間の相互作用」について解説。これは、人間やロボットなど多数のエージェントがインターネットで接続・運営されるマルチエージェント社会において、スムーズなコミュニケーションに必要な深層レベルの感情理解や、雰囲気



北海学園大学学報
発行・編集 北海学園大学
札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 〒062-8605
電話 011(841)1161
FAX 011(824)3141
URL http://hgu.jp/
gakuho@tyhr.hokkai-s-u.ac.jp
発行日 (6月1日、9月1日、12月1日、3月15日)
購読料 1部80円 年間320円
制作・印刷 株式会社人力社

主な記事

- 経済学部 小坂直人教授「無停電電話」の崩壊 2面
- 北海学園学術研究助成事業報告の経済学部 森下宏美教授 3面
- 日本地域学会第55回(2018)年次大会公開シンポジウム 4面
- 学園人脈記 第6回 札幌ノースウインド代表 岩崎圭介氏 5面
- 経済学部 天売島で「地域協働フィールドワーク」 6面
- 国際交流プログラム 海外研修で異文化体験 7面
- 平成30年度 保護者懇談会 8面

秋の叙勲 2名受章

政府は11月3日付で「平成30年秋の叙勲」受章者4079人を発表した。本学関係者では、矢村宏法務研究科教授が裁判官功労により瑞宝重光章を、また、矢吹徹雄法務研究科教授が教育研究功労・警察管理運営功労により瑞宝中綬章を受章した。「瑞宝章」は国及び地方公共団体の公務又は公共的な業務に長年にわたり従事して功労を積み重ね、成績を挙げた人に授与される。両先生の略歴等は次の通り。



瑞宝重光章

法務研究科 矢村 宏 教授

【略歴】
昭和22年10月27日生まれ。昭和46年6月東京大学法学部卒業。昭和49年4月から昭和59年3月までの期間に、裁判所として、東京地方裁判所、札幌家庭裁判所、札幌地方法院裁判所、大阪地方裁判所、最高裁判所刑事部で勤務。その後、判事に任官し、昭和59年4月裁判所書記官研修所刑事教官、昭和62年4月釧路地方・家庭裁判所書記官、平成元年3月裁判所書記



瑞宝中綬章

法務研究科 矢吹 徹雄 教授

【教育活動】
主な担当講義である「刑事訴訟法Ⅰ・Ⅱ」では、訴訟法の解釈と運用について、学説・判例・実務の視点から深く理解する講義を行っている。「刑事法演習Ⅰ・Ⅱ」では、刑法総論及び各論の問題に関する理解を判例・学説をふまえた上で発展させる講義を行い、未来の法曹界の担い手を育成するために尽力されている。

【略歴】
昭和23年10月10日生まれ。昭和47年3月北海道大学法学部卒業。昭和49年弁護士登録。昭和51年3月北海道大学大学院法学研究科私法専攻修士課程修了。昭和53年4月北星学園大学経済学部経済学科専任講師、昭和58年4月より北星学園大学経済学部経済学科助教授、平成元年4月北星学園大学経済学部経済学科教授、平成14年北星学園大学経済学部経済法学科教授を経て平成17年本学大学院法務研究科教授に就任、平成25年4月から平成29年3月まで同研究科長を務める。平成12年6月23日から

工学部開設50周年記念 2018年度市民公開講座

まちのリノベーション -社会インフラから住宅まで-

工学部開設50周年記念・2018年度市民公開講座が11月10日、D31番教室で開催された。安心・快適に住み続けられるまちの実現をめざし、水道・地域・橋・住宅の分野から現状とリノベーションを紹介した。



工学部 山本裕子准教授

講演Ⅰ「水道インフラのリノベーション」
工学部准教授 山本裕子
日本では全国どこでもいつでも安全な水を得ることができ、しかし、老朽化した配水管の更新や施設・管路の耐震化、人口減少や節水機器の普及による水道料金収入の減少、技術者不足など課題は山積している。山本准教授は「インフラの集約や余剰施設の廃止と有効利用、周辺事業体との共同発注・管理など、施設と経営体制両方のリノベーションが必要」と指摘した。



工学部 岡本浩一教授

講演Ⅱ「地域のリノベーション」
工学部教授 岡本浩一
岡本研究室で実施した空き家に関する調査と、沼田町での空き家セルフリノベーション活動を、学生の奮闘と成長ぶりを含めて紹介した。15年後は10件のうち3件が空き家になる推計なども踏まえて、岡本教授は「空き家をへ点として捉えるのではなく、地域の「面の要素」として捉え、居住者とともに地域の将来ビジョンを描くことが重要だ」と述べ、学生の若い発想や力の一つのきっかけになる可能性を示した。



工学部 小幡卓司教授

講演Ⅲ「橋は大丈夫？」
工学部教授 小幡卓司
近年、高度成長期に建設された橋、トンネル、道路など交通インフラ施設は老朽化が大きな問題になっている。小幡教授は木曾川大橋(1963年完成)の斜材断裂などを説明し、「社会基盤構造物は多様な環境条件に配慮した維持管理が必要。直すべきものはきちんと直す。それには経済的で効果の高い技術開発が必要だ」と述べ、新しい技術は、奇をてらったものではなく、特殊な材料も使われない。論拠と効果が明確で、どの地域の工務店でもすぐに実施できるもの」と説明した。参加者は興味をもって話に聞き入っていた。



工学部 植松武是教授

講演Ⅳ「性能を向上させる住宅のリノベーション技術」
工学部教授 植松武是
植松教授は、住宅の性能を向上させるリノベーション技術として、北海道が発信している耐震性と断熱性を同時に向上させる「耐震・断熱改修」を紹介した。実際の工事現場の動画も見せて、「この技術は、奇をてらったものではなく、特殊な材料も使われない。論拠と効果が明確で、どの地域の工務店でもすぐに実施できるもの」と説明した。参加者は興味をもって話に聞き入っていた。

平成30年北海道胆振東部地震により被災した受験生への特例措置について

平成30年北海道胆振東部地震による被害に遭われたみなさまに、心からお見舞い申し上げます。

本学では、災害救助法適用地域で被災した世帯の受験生に対して、経済的負担を軽減し、進学機会の確保を図るため、平成30年度に実施するすべての学部・大学院の入学試験について、次のとおり入学試験検定料の特例措置を実施することといたしました。

この措置により入学試験検定料の返還を希望される方は、以下をご参照の上、所定の手続きをお取りください。

1. 特例措置の対象となる入学試験

平成30年度に実施するすべての学部・大学院の入学試験（平成31年度入学試験）

2. 措置内容

入学試験検定料の全額返還

3. 返還の対象となる方

上記1. の入学試験の受験生で、その主たる家計支持者が北海道胆振東部地震により災害救助法適用地域において

被災し、次のいずれかに該当する方

- (1) 主たる家計支持者が死亡又は行方不明の場合
- (2) 主たる家計支持者が所有する自宅家屋が全壊、大規模半壊、半壊、流出した場合

4. 申請方法

入学試験検定料の全額返還を希望される方は、平成31年3月18日(月)までに申請書類を所定の送付先へご提出ください。申請書類の確認が終わり次第、ご指定の口座に全額返還します。

【送付先(お問い合わせ先)】

- ・大学の学部に関する入学試験全般
⇒ 入試部入試課
- ・大学の学部に関する編入学試験
⇒ 各学部
- ・大学院に関する入学試験全般
⇒ 大学院 各研究科

※振込手数料は返還の対象外となります。

※入学試験種別により送付先が異なりますので、ご注意ください。

close-up

「無停電神話」の崩壊

ある程度の範囲で停電することはない、電力自由化の進展は、北電が従来担ってきたこの役割を握り崩しつつある。私共、そのように思っていた一人である。しかし、これは過信であり、「無停電神話」であった。日本の原発は「多重防護」によって安全であり、絶対に過酷事故など起き得ないという「安全神話」と同じ思考様式に自分が陥

2018年9月6日未明胆振東部を震源とするマグニチュード6.7の大地震が北海道を襲った。厚真町を中心に41名もの犠牲者が出た。札幌でも「液状化」被害が広がるなど、地震エネルギーの大きさに改めて驚愕した。加えて、今回の地震は、道内全域で29.5万戸が停電する事態、いわゆる「ブラックアウト」を経験したことも特筆される。

日本電力システムの強固であり、台風や地震等であって、今回の地震は、道内全域で29.5万戸が停電する事態、いわゆる「ブラックアウト」の原因調査が進み、安定供給に資する電力システム構築に向けた提言が多くの識者によってなされている。その際、北電の責任や賠償を声高に叫ぶことも多い。北電が公益事業者として供給責任を果たすことを期待しての発言ではないだろうか。北電がこの



経済学部教授
小坂直人

あるが、電力自由化の進展は、北電が従来担ってきたこの役割を握り崩しつつある。私共、そのように思っていた一人である。しかし、これは過信であり、「無停電神話」であった。日本の原発は「多重防護」によって安全であり、絶対に過酷事故など起き得ないという「安全神話」と同じ思考様式に自分が陥



9月6日、停電で信号もネオンも消えた札幌・すすきのの交差点

「無停電神話」の崩壊

点で十分な用意がなかったのは残念である。また、系統システムがダウンした場合、個々の需要家が自ら電源を調達することも必要になる。家庭では乾電池やバッテリーが欠かせない。医療機関等ではもっとも非常用発電機が設置されている場合があるが、小さなクリニックでは、この用意がほとんどない。北電だけでなく、消費者の側もまた万に備える必要があるということであらう。

去る9月29日、ホテル札幌ガーデンパレスにおいて、平成30年度9月期卒業証書・学位記授与式が行われた。



学部長から卒業証書・学位記を授与

卒業証書・学位記授与

平成30年度9月期



学部長から卒業証書・学位記を授与

去る9月29日、ホテル札幌ガーデンパレスにおいて、平成30年度9月期卒業証書・学位記授与式が行われた。

卒業生は70名(経済学部28名・経営学部11名・法学部22名・人文学部7名・工学部2名)。

各学部長から一人一人に卒業証書・学位記が授与された。

「自分が卒業した学校」のことを、日本語では「母校」といいますが、これは「alma mater」というラテン語に由来します。アルマ・マータは「滋養物を与える(親愛なる母)」というほどの意味です。そして「同窓会」とは同じ母校を卒業した人々の集まりのことです。

おそろく皆さんは、在学中には自分の大学のことを自覚的にはあまり意識しなかったでしょう。しかし社会に出ると、好むと好まざるにかかわらず、いろいろな場面

で北海学園大学という名前が皆さんについて回ります。それとともに卒業して日が経つと、母校に対する郷愁や愛着が次第に募ってきます。ですから、卒業後も北海学園大学に関心をもち、必要に応じて援助や叱咤激励を賜りたいものです。大学の評価は、主として教育力、研究力、社会的貢献によって決まりますが、卒業生・同窓生の活躍も大きな要因です。

北海学園大学が皆さんの母校として、誇らしげに、頼もしくあるためには、在学生や教職員の研鑽と協力が不可欠です。皆さんが本学の卒業生として、社会で幅広く活躍されるよう祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

高橋はるみ北海道知事から感謝状を受け取った安酸学長

学校法人北海学園は11月5日、京王プラザホテル札幌で開催された北海道・包括連携協定締結企業等交流会

において、協働事業に多大な功績があったとして、高橋はるみ北海道知事より感謝状が贈られた。

北海学園は平成25年に北海道と包括連携協定を締結。5年間の様々な取り組みが評価された。

平成27年以降、本学からは47名の卒業生が北部方面へ入隊している。

感謝状贈呈式にて。左から北部方面総監 陸将田浦正人氏、安酸学長、自衛隊札幌地方協力本部長1等陸佐 菅股弘信氏

自衛官募集業務に貢献した北部方面隊創設六十六周年記念行事において、本学が永年にわたり道央地区の自衛官募集業務に貢献したと

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

功績賞受賞

工学部教授 山ノ井高洋

表彰状を手に(右が筆者)

日本知能情報フアジイ学会

工学部
岡本浩一教授

「あるのが当然? なくてはならない?」公共施設の明日を考える」

工学部教授 岡本浩一
(都市・住環境計画)

近年、新しい公共、P・P・F、まちづくり市民事業、自助・共助・公助など、公共サービスを再考するキーワードが複数出現して

を概観しました。次に公共的な施設やサービスを知恵と工夫により実現した道内外の事例を、考え方と成立経緯に注目して紹介しました。大切なのは公共施設という「容れもの」ではなく、公共施設を通じて住民の何をサポートしているのかという「役割・

なみ」です。各事例の共通点は、住民も巻き込みながら丁寧かつ真剣に「役割・なみ」を考え直し、実現方策を柔軟に見出す姿勢です。質疑では、公的不動産を定期借地で活用する事例の収支バランスなど、核心を突く質問を複数いただき、小さなきっかけになれたかも知れないと感じました。

第2回(10月18日)

留萌の将来の交通と地域づくりを考える」

工学部教授 鈴木聡士
(交通・環境システム)

留萌市は今後、2045年までに人口が約10000人へと半減することが予測されています。このような超人口減少社会において、これからどのような交通と地域づくりが求められるのか?

本講演では、公共交通を取り巻く「総論賛成各論反対

第38回 開発特別講座

開発研究所主催の第38回開発特別講座が10月4日、18日、11月1日の3回にわたり、留萌市中央公民館で「るもの」の未来への投資と都市づくり」を共通テーマに開催された。

第1回(10月4日)

「あるのが当然? なくてはならない?」公共施設の明日を考える」

工学部教授 岡本浩一
(都市・住環境計画)

近年、新しい公共、P・P・F、まちづくり市民事業、自助・共助・公助など、公共サービスを再考するキーワードが複数出現して

を概観しました。次に公共的な施設やサービスを知恵と工夫により実現した道内外の事例を、考え方と成立経緯に注目して紹介しました。大切なのは公共施設という「容れもの」ではなく、公共施設を通じて住民の何をサポートしているのかという「役割・

なみ」です。各事例の共通点は、住民も巻き込みながら丁寧かつ真剣に「役割・なみ」を考え直し、実現方策を柔軟に見出す姿勢です。質疑では、公的不動産を定期借地で活用する事例の収支バランスなど、核心を突く質問を複数いただき、小さなきっかけになれたかも知れないと感じました。

第2回(10月18日)

留萌の将来の交通と地域づくりを考える」

工学部教授 鈴木聡士
(交通・環境システム)

留萌市は今後、2045年までに人口が約10000人へと半減することが予測されています。このような超人口減少社会において、これからどのような交通と地域づくりが求められるのか?

本講演では、公共交通を取り巻く「総論賛成各論反対

日本地域学会第55回(2018)年次大会 公開シンポジウム

「人口減少社会の地域づくり」をテーマとした日本地域学会第55回(2018)年次大会公開シンポジウムが10月7日、本学D20番教室で開催された。後援は本学開発研究所。前半は、本学OBでもある北広島市長・上野正三氏による基調講演が行われた。後半は「交通」「観光」「食」「財政」の各分野の専門家によるパネルディスカッションで、最新の取り組みやアイデアなどが示された。



左から、司会の本学工学部・鈴木聡士教授、北広島市長・上野正三氏、同市・企画財政部長兼BP推進室長・川村裕樹氏、北海道大学公共政策大学院長・教授・高野伸崇氏、一般社団法人北海道開発技術センター地域政策研究所長・原文宏氏、フードライター/M-I合同会社ほかいどう食図鑑事業部・専務・小西由稀氏、本学開発研究所長・西村宣彦経済学部教授

人口減少社会の地域づくり

1位に選ばれるなど、様々な成果を上げつつある。

上野市長は初めて「まちづくりは、まちの歴史を知ること。そこに多くのヒントがある」と言い、明治17年の広島県人103人による開拓から今日までの歴史を辿った。

続いて「自然と創造の調和した豊かな都市」をテーマとした第5次総合計画(平成23

32年度)を説明。人口減少に対する施策としては、子育て世代の定住促進を目的に、若い世代が北広島市内に住宅を取得する際に助成金を支給したり、高齢者や若い世代の住み替え支援事業を実施し、北海道日本ハムファイターズBP(ボールパーク)の整備決定や、道内の「住みよきランキング」5年連続

協働によるまちづくりは究極の地方創生。夢を持ちその展望を明らかにすることで、世の中の流れを変えられる。これは先人から引き継いだ挑戦だ」と語った。

また、BPについて「ファイターズと連携しボールパーク・スポーツを核とした

交通のあり方」・インターネッ社会になり観光客のスポット訪問が増えていることから、「スポット訪問以外の時間をどのように使ったらいいか、目的地・行動など時間デザインを提案する人材が必要」と提言。

一般社団法人北海道開発技術センター地域政策研究所長・原文宏氏「モビリティと観光・地域づくり」・シニック(景観)とバイウェイ(わき道・より道)を組み合わせた、地域の魅力を「道」でつないで個性豊かな地域、美しい環境づくりを目指す施策「シニックバイウェイ北海道」を紹介。地元で観光客を受け入れる連携人口を増やし、移動そのものを観光化することで新たな北海道の魅力となり交流人口を増やせる。人口が減少しても活力ある地域を作れる」と話した。

「フードライター」小西由稀氏「人口減少社会における『食』の価値と課題を考える」・第一次産業の従事者高齢化と担い手不足、食の消費量の減少などの課題をあげ、これらに対し「農業漁業を次世代へつなぐ共生産者の意識を持つこと」や「食の魅力を深掘りしてブランド化につなげる」など、課題解決の種をまく大切さを説いた。

本学開発研究所長・西村宣彦経済学部教授「不確実性の高まりとこれからの自治体財政運営」・先の見通しが立たない国の財政状況から、今後の自治体について「厳格な緊縮策は副作用も大きい。あらゆる行財政資源の使用について、未来の投資につながるか厳しく問う必要がある。これからは痛みを分かち合う時代。希望を捨てず諦めない意志が重要」と述べた。

ニューヨーク州で日系人初の判事として活躍されているトウコ・セリタ氏(ニューヨーク州クイーンズ郡最高裁判所判事代行 トウコ・セリタ氏)の講演が、前半はセリタ氏の講演が行われた。札幌生まれのセリタ氏は、5歳のときに画家の両親と一緒に米国へ移住し、ニューヨークで育った。「私の中には日本と米国の2つの文化があり、多様性に富んだ社会で育ったことに感謝している」と話す。

セリタ氏が判事になった理由の一つは「当時、米国内にアジア系米国人の判事があまりいなかったから」。しかし、「アメリカ社会には今でもアジア系女性や有色人種の女性に対して人種差別が行われている」と言い、その現状と、人身売買調停裁判所での具体的な取り組みを説明した。

セリタ氏が判事になった理由の一つは「当時、米国内にアジア系米国人の判事があまりいなかったから」。しかし、「アメリカ社会には今でもアジア系女性や有色人種の女性に対して人種差別が行われている」と言い、その現状と、人身売買調停裁判所での具体的な取り組みを説明した。

法学部
樽見弘紀教授

「市民主導の生き残り戦略を考える」訪ねるもいい、移るもいい、(るもの)まちづくりのヒント集」

法学部教授 樽見弘紀
(市民社会・公共政策)

まず、洞爺湖畔に若者が引寄せられる小さなコミュニティが出現していること、また、ニセコ町に故人の遺志をうけて「ハロウィンカボチ

ヤ」を作り続ける農場があることなどの事例に触れながら、市民主導のまちづくりの具体的な工夫を話した。

基調講演後、会場から手上がり、「学園大法学部出身です。先生の授業もとりました」と切り出した男性から「勤務先の派遣で留萌に住んでいるが、このまちには何も無い。若い僕らはここで何をしたいのか」との質問を投げられました。私は「何も無いまちに派遣されるのも組織に働く者の楽しみ。一つ、マチデカラ(まちに埋もれてい

る魅力)を発見するのはひとえにあなたの想像力にかかっている」と答えました。これに重ねて、留萌市に移住、コミュニティFM局の運営に関わることを決めた若い女性から情報発信を通じてまちの活性化に寄せる思いが語られました。

工学部
鈴木聡士教授

的にデータとして理解することから始めるべきであるとともに、危機感とそれに対する実際の行動が、問題解決のヒントになることをお伝えしました。

第3回(11月1日)

「市民主導の生き残り戦略を考える」訪ねるもいい、移るもいい、(るもの)まちづくりのヒント集」

法学部教授 樽見弘紀
(市民社会・公共政策)

まず、洞爺湖畔に若者が引寄せられる小さなコミュニティが出現していること、また、ニセコ町に故人の遺志をうけて「ハロウィンカボチ

ヤ」を作り続ける農場があることなどの事例に触れながら、市民主導のまちづくりの具体的な工夫を話した。

基調講演後、会場から手上がり、「学園大法学部出身です。先生の授業もとりました」と切り出した男性から「勤務先の派遣で留萌に住んでいるが、このまちには何も無い。若い僕らはここで何をしたいのか」との質問を投げられました。私は「何も無いまちに派遣されるのも組織に働く者の楽しみ。一つ、マチデカラ(まちに埋もれてい

る魅力)を発見するのはひとえにあなたの想像力にかかっている」と答えました。これに重ねて、留萌市に移住、コミュニティFM局の運営に関わることを決めた若い女性から情報発信を通じてまちの活性化に寄せる思いが語られました。

第17回 人文学の挑戦

第17回人文学の挑戦×北海道みらい事業が10月7日、紀伊國屋書店札幌本店で行われた。今年3月、風土デザイン研究所から出版された「アイヌ文化と森」人々と森の関わり」(共著の著者3人が講演。本学人文学部客員研究員・出利葉浩司氏は道

具の利用と森について、文化庁文化財部伝統文化課アイヌ文化振興調査官の内田祐一氏は植物と人々、本学人文学部・手塚薫教授は千島列島の人々と木の利用について、それぞれ紹介した。

アイヌの人々とアイヌ文化を「森」との関わりから紹介した3人の講師

出利葉浩司氏、内田祐一氏、手塚薫教授

アイヌ文化と森、アイヌ文化と森、アイヌ文化と森

アイヌ文化と森、アイヌ文化と森、アイヌ文化と森

アイヌ文化と森、アイヌ文化と森、アイヌ文化と森

アイヌ文化と森、アイヌ文化と森、アイヌ文化と森

アイヌ文化と森、アイヌ文化と森、アイヌ文化と森

アイヌ文化と森、アイヌ文化と森、アイヌ文化と森

アイヌ文化と森、アイヌ文化と森、アイヌ文化と森

人文学部は10月12日、コンピュータ実習室Eで、北海道後志総合新興局から荒木祐亮氏と秋保沙央里氏を招いて第2回北海道観光・地域振興特別講座を開催した。

ニセコエリアは世界のベストスキーリゾートにランクインするなど海外から大きく注目され、外国人観光客が年々増加している。ニセコの課題は深刻な人材不足だ。冬季は約1800人の期間雇用スタッフが働いているが、その内約1200人が外国人。荒木氏は「特にマネージメントを担う日本人スタッフが不足しており、サービスレベルの維持・低下が大きな課題」と指摘した。

2016年3月、北海道教育委員会後志教育局は後志管内のリゾート企業(7社)、農協、市町村とタイアップ協定を締結し、グローバル人材の育成に取り組んでいる。その一つが「ShiriBeshi留学」(通称:ニセコ留学)。インターンシップと地域交流等を通して学ぶ国内留学プログラムだ。研修先は宿泊施設、飲食店のほかツアーガイドやマーケティングの仕事など様々。学生たちは活きた英語を学び、地元企業は繁忙期に人材を確保できるメリットがある。大学生の参加が多



北海道後志総合新興局・秋保沙央里氏と荒木祐亮氏

く、秋保氏は「さまざまな環境で、壁にぶつかっては乗り越え、成長していく姿が見られる」と手応えを語った。

北海道大学生のShiriBeshi留学体験談

法学部3年・細井彪雅さん

「20人の従業員と共同生活し、その内7割が外国人。毎日が楽しかった。カナダ留学の経験もあるが、その時と同じくらい英語を使い、むしろリアルな英語が身についたと思う」

法学部2年・和田直平さん

「自分の英語力を試したくて留学に参加したが、少ししか通じなかった。それでも周りの人たちのサポートがあったので、無事1カ月間働くことができた。自信となった。いろいろな人たちと交流することができたのでオススメです」

後志総合新興局ShiriBeshi留学shiribeshi.pref.hokkaido.jp/tss/niseko_abroad.htm

後志総合新興局ShiriBeshi留学shiribeshi.pref.hokkaido.jp/tss/niseko_abroad.htm

後志総合新興局ShiriBeshi留学shiribeshi.pref.hokkaido.jp/tss/niseko_abroad.htm

岩崎さんは大学2年の春休み、長野県白馬で行われていたモーグル全日本選手権大会の練習中に転倒し、脊椎を損傷。以後、車椅子の生活となった。

大学は3年次の前期を休学し、後期から復学したが、初めは、体調管理の難しさも

あつて休むことも多かった。さらに、学業よりスキー優先の生活だったため全然単位が取れていない。たれもが4年で卒業は無理だろうと思っていた。しかし4年生になり、これ以上親にも自分にも甘えられないと一念発起。偶然にも同じくらい単位を取れていなかったやつと出会い、二人で毎日、朝から晩まで鬼のように勉強した。卒業設計も一人で、小野恭平教授(現在、名誉教授)のもとで制作。『出来の悪い二人の学生を、小野先生は温かく見守ってくれました笑』と振り返る。その作品は小野先生が退職されるまで大事にとっておいてくれたという。そして1年間で58単位を取得し卒業。その後半年、公務員予備校に通い、北海道職員となった。



第4回たいせつカップ(11月11日)での攻防戦

車椅子バスケットボールチーム札幌ノースウィンドの代表 岩崎圭介氏

北海道総合政策部情報統計局情報政策課勤務
工学部建築学科 平成15年度卒・33期生

「自分には無理」と思うことが障がいだ

そんななか、練習を追い込みすぎ本業の仕事も忙しくなり、座骨部に褥瘡(じよくそう)を作ってしまった。一般的に褥瘡は、寝たきりの高齢者に多い床ずれとして知られているが、車椅子バスケの選手が抱える問題のひとつだ。岩崎さんは入院、手術へ。

「バスケットができない自分ができることは、自分が勉強してきたことをみんなに伝えること」。

2011年に札幌勤務となり、現チームへ。当時、チームは低迷しており、一から立て直すため、キヤプテンに就任。しかし、なかなか結果が出なかった。自身は休暇を取りながら、仙台の強豪チームの練習や、次世代の日本代表を目指す選手たちのジャネットスキャンに参加。手応えを感じていた。



しさがわかるだろう。車椅子の操作技術と、自分の体の使える機能を最大限に活用して行うスポーツなんです。

岩崎さんが本格的に始めたのは大学卒業後。初任地の網走時代は、札幌や釧路、北見にまで出向いて練習

とをみんなに伝えること。試合のビデオを繰り返し見て分析するなど、課題を積み上げながら試行錯誤する日々が2年続いた。

そして自身も復帰した2015年、ついに北海道地区予選で優勝。続く2016年も優勝し、連覇を達成した。

岩崎さんにとって車椅子バスケとは何なのか。「最近になって思うんですが、障がい者になったことを、僕自身がまだ受け入れられていないんです。バスケットをやることでスポーツ選手としていられる。バスケットをやめてしまつと、普通の障がい者になってしまつ。それが嫌で、障がい者スポーツの中でも一番カッコよくて、一番難しそうな車椅子バスケに魅力を感じるんです」。

岩崎さんが障がいを通じて学んだことを、後輩たちへのメッセージとして話してくれた。「一番の障がいはカラダの問題ではなく、何かに挑戦しようと思った時に『自分には無理』と思うこと。これは誰にでも言えることです。障がいを作っているのは自分、考え方ひとつで可能性は無限に広げられると思います」。

岩崎さんに次の目標を聞いた。

「やるからには東京パブリックをめざします」

プロフィール 1981年札幌市生まれ。2001年3月大学2年で、モーグル全日本選手権大会の練習中に転倒、脊椎損傷で車椅子生活となる。2004年、北海学園大学工学部建築学科卒業。同年公務員予備校に通り、車椅子バスケットボールを始め。2005年、北海道職員に採用され、網走支庁勤務。2011年、札幌勤務。札幌ノースウィンドのキャプテンとなる。2015年、2016年、車椅子バスケットボール選手権大会北海道地区予選優勝。



小説家 川澄 浩平
経済学部経済学科
平成20年度卒・56期生

この作品は札幌を舞台としており、ミステリーではあるが、実にはさわやかな青春と幼なじみで不登校中の少年が、日常のちょっとした謎を解き明かしていく物語。ヒロインの同級生3人を含め、それぞれのキャラクターが良く描かれ、川澄さんのこだわりの

一つ。「実際の経験にもとづいて現実の空気感を表現したかった」ので、どこかに行くシーンでは実際に行き、ケーキを食べる描写ではケーキの写真を撮ったり、一口ずつ食

鮎川哲也賞受賞

ミステリー小説作家デビュー



『探偵は教室にいない』東京創元社

大学時代はごく平凡な学生だったという。卒業後は2年間、会社員として働いたが、小学生の頃からの夢だった作家への道を歩むために退職し、執筆活動へ。漫画原作者として少年ジャンプNEXTで2014年から15年にかけて、2本の

「探偵は教室にいない」は、川澄さんのこだわりのキャラクターが良く描かれ、川澄さんのこだわりの



今年も大盛況だった北海マルシェ

ホームカミングデー
母校で友との再会
第11回ホームカミングデーが10月6日、豊平キャンパスで開催された。

第6回学園かえるカフェは、帯広市民ラジオ・スーパーバイザー兼プロデューサー・松崎樹氏とHBCラジオ「カーナビラジオ午後一番!」パーソナリティ・山根あゆみ氏をお迎えし、テーマは「ラヂオの時間」を周回遅れのトップランナーメディア

か、放送局の新しい取り組みや、北海道胆振東部地震の際の様子を話し、参加者はラジオの大切さを実感しながら聞いていた。

産直野菜・果物即売会「北海マルシェ」や無料カイロ施術も大盛況。大学生協食堂「学食deランチ」では、友との再会を楽しんでいた。

平成30年度
豊平会 総会・懇親会
「同窓のタベ」

同窓会「豊平会」総会・懇親会(同窓のタベ)が10月27日、札幌パークホテルで開催され、約800名が出席した。本学フリーフォームレスジャズオーケストラの演奏や、札幌出身のシンガーソングライター・いとたいのライブ、学園グレイトビゴなどで大いに盛り上がった。

平成30年
司法試験 3名合格

法務省から9月11日、平成30年司法試験の結果が発表され、本学法務研究科(法科大学院)から、林拓哉さん、小関亜耶さん、小倉沙織さんの3名が合格した。

これで本学法科大学院の平成20年から11年間の合格者数は合計39人となった。今年受験者総数は5238人(前年比729人減)、合格者は1555人(前年比18人減)、受験者数に対する合格率は29・11%(前年比3・25増)だった。

司法修習支援金給付
これから司法修習生として任に当たる3人に対して9月27日、法務研究科長、教育振興委員長、大学院事務部長、同席の下、学長(教育振興会長)から激励の言葉とともに司法修習支援金が給付された。

9月29日には札幌グランドホテルで合格者祝賀会が開催され、三人を称えるとともに今後の活躍に期待が寄せられた。

夢への第一歩
平成27年度標準未修者コース修了 小関 亜耶

私は、平成25年3月に北海学園大学法学部法律学科を卒業後、平成28年3月に北海学園大学大学院法務研究科を修了し、今年3度目の受験で司法試験に合格しました。

高校生の頃から法曹に憧れ、ロースクールのある北海学園大学を選びました。そして、ようやく今年になって夢への第一歩を踏み出すことができました。法学部に在籍していた時から司法試験に合格するまで、先生や事務員の方、家族等多くの方々を支えられてきました。私のこの合格は北海学園大学関係者皆さまの支えがあってこそこのものだと思います。

合格までの道のりは今まで経験したことのないほど苦しく辛いものでした。長い間、体の不調や眠れない日が続きました。それでも頑張ろう、続けようと思つてきたのは私を今まで支えてくれた方々の存在があったからです。

私は、私を支えてくれた方々への恩を返すように困って苦勞している方の手助けができる弁護士となれるよう、これからも頑張りを続けます。

努力は必ず報われる
平成26年度標準未修者コース修了 林 拓哉

私は、札幌藻岩高校を卒業後、北海学園大学法学部に入學しました。法学部の勉強に面白さを感じていたこと、裁判官に憧れがあったこと、ゼミの千葉卓先生が背中を押してくださったことから、司法試験の合格を目指すことを決意しました。

昨年の試験で再び不合格となったときは諦めようと思いましたが、諦めたら後悔すると思い、ラストチャンスと決めた4回目の挑戦で司法試験に合格することができました。司法試験に合格するまでの日々はとても苦しかったです。しかし、努力は報われるものだと実感しました。家族や友人、先生方、私を支えてくださった皆さん、本当にありがとうございました。司法修習では勉強はもちろん、同期の修習生、教官、実務修習担当の皆さんとの交流も積極的に行い、様々な考え方や価値観を学びたいです。そして、一つひとつの事件に真剣に向き合い、いつも丁寧かつ謙虚に、誠実に仕事に取り組む法曹を目指していきたいです。

感謝の気持ちを忘れずに
平成27年度標準未修者コース修了 小倉 沙織

私は札幌東高校を卒業後、東京外国語大学外国語学部東南アジア課程ビルマ語科でビルマ語を専攻しました。法律的な知識を身に付けることで日本とビルマという良好な関係構築の一助になりたいという思いから弁護士を志し、北海学園大学大学院法務研究科に入学して、今回3度目の挑戦で司法試験に合格することができました。

全く法律の勉強をしたことがなかったため、法律的な知識や考え方の面で苦勞もありました。しかし、本研究科は少人数制で、授業も質問しやすいアットホームな雰囲気がありました。OBの先輩方がゼミなどで親身になってくださったのでしっかりと納得できるまで理解を深められました。

何度も挫けそうになりましたが、先生方や仲間、家族、友人達の強い励ましがあったからこそ、今回合格することができたのだと思います。これから司法修習を経て実務に出て行くこととなりますが、感謝の気持ちを忘れず努力を続けていきたいと思っています。

経済学部

天売島で「地域協働フィールドワーク」

「島に何が必要か」を考え実践的な活動

経済学部の授業「地域協働フィールドワーク」では、7人の学生たちが天売島で中・長期滞在し、地域活性化をめざして活動している。主な内容は、歴史等を調査して書籍をつくることと、空き店舗活用。8月10日と11日には空き店舗を活用した飲食店を営業し、島民と観光客と学生の交流を図った。



▲飲食店の営業中、学生たちと島の住民、観光客が交流した



天売島にて、協力していただいた関係者の方々と

書籍班は、現地で追加調査を実施。「漁業」「お祭り」「世界最大の繁殖地といわれる海鳥「ワトウ」の3つをテーマにまとめ、1月に刊行予定。その後、イベントなどで配布する。

「島のことを知りたいという意欲が大切で、その気持ちは島のみなさんにも伝わっていた。これは2016年から続

ていきたー」

▼市川雄二郎さん(2年)「来

年もこの授業を履修して後

輩たちを引っ張っていきたく

い。今までの活動を継承しつ

つ、新しいことにもチャレン

ジしていきたい」

▼安田真奈さん(2年)「札幌

では見ることのできない景

色を見て島の良さを知った」

▼福田愛子さん(2年)「普段

の生活では出会うことがで

きない方々とお話しでき、貴

重な経験になった」

▼渡部凌さん

(2年)「天

売島の皆

さんの温

かさ、人と人

なりの大切さを感じた」

▼学生リーダー兼書籍班リ

ーダー・牧野睦さん(3年)

「島のことを知りたいという

意欲が大切で、その気持ちは

島のみなさんにも伝わってい

た。これは2016年から続

ていきたー」

▼市川雄二郎さん(2年)「来

年もこの授業を履修して後

輩たちを引っ張っていきたく

い。今までの活動を継承しつ

つ、新しいことにもチャレン

ジしていきたい」

▼安田真奈さん(2年)「札幌

では見ることのできない景

色を見て島の良さを知った」

▼福田愛子さん(2年)「普段

の生活では出会うことがで

きない方々とお話しでき、貴

重な経験になった」

▼渡部凌さん

(2年)「天

売島の皆

さんの温

かさ、人と人

なりの大切さを感じた」

空き店舗を活用し交流拠点に

学生は、島の祭りに参加してお神輿を担いだり、露店の手伝いなどを行っていた。島のみなさんとも親しくなり「若者だからできることを考えてほしい」「可能性を自分たちで狭めないで、もっと相談してほしい」などの助言も受けた。

提供メニューや価格設定、宣伝広報、保健所への営業許可申請等、初めての準備作業を急ピッチで行い、いよいよ開店にむけて8月7日、7日間の滞在日程で天売島へ。

お店では、焼き鳥やパンケーキ、海鮮うどんなどを提供。メンバー全員の奮闘とたぐささんの人たちの協力のもと、2日間で述べ100人以上が訪れ大繁盛となった。今後の課題について空き店舗活用

班代表の今野友輝さん(3年)は、「この事業が天売島に定着できるよう環境を整えていく」と話した。

▼川岸賢輔さん(3年)「CFは、多くの人に知ってもらうために企画書、広報活動が重要だとわかった」

▼渡部凌さん(2年)「天売島の皆さんの温かさ、人と人なりの大切さを感じた」

▼安田真奈さん(2年)「札幌では見ることのできない景色を見て島の良さを知った」

▼福田愛子さん(2年)「普段の生活では出会うことができない方々とお話しでき、貴重な経験になった」

▼渡部凌さん(2年)「天売島の皆さんの温かさ、人と人なりの大切さを感じた」

▼学生リーダー兼書籍班リーダー・牧野睦さん(3年)「島のことを知りたいという意欲が大切で、その気持ちは島のみなさんにも伝わっていた。これは2016年から続

ていきたー」

現場で学ぶ!

経営学部
佐藤大輔ゼミ

「プロジェクト180」

GISを活用し「記憶地図」作り

8月7日から3週間にわたって行われた学芸員課程の奥尻島研修。「村まつり」をテーマに聞き取り調査を行い、地元の魅力を掘り起こすきっかけとなった。



浅妻 佑軌
人文学部
日本文化学科2年



佐々木 理子
法学部
法律学科3年

学芸員課程は1部の全学の学生が履修可能で、研修や実習などを通して共に学べるのが特徴の一つだ。学生が自主的に企画・実施する奥尻島研修には、法学部人文学部、工学部の学生計9名が参加した。

今年のテーマは「村まつり」。奥尻島では夏になると各地区で村まつりが行われているが、1993年の北海道南西沖地震が村まつりの変容にどのように関係してきたのかを調査した。

後半は、今回の研究の大きな目的の一つであるワークショップとGIS(地理情報システム)を活用した「記憶地図」の作成を行った。「記憶地図」とは、聞き取り調査等により地域住民の記憶の中にある情報を抽出し地図化したもの。具体的には、3年前にまつりが廃止になった谷地地区の住民8名に、村まつり・魅力・災害の3つについて自由に語り合ってもらい、学生たちはGISで作成した大判の地図に、聞き取った情報のメモを重ねていった。

村まつり復活への呼水に

「魅力」の聞き取りを担当した浅妻佑軌さん(人文学部2年)は、「地図を使うことによって、住民たちが盛り上がりつつ、少しずつ語り始めたという。これらの情報はGISに落とし、「災害」と「村まつり」と魅力」の2枚の記憶地図を



GISで作成した地図に住民の記憶を重ねていくワークショップにて

の効果を語る。また、災害については、学生たちと打ち解け話が盛り上がりつつ、少しずつ語り始めたという。これらの情報はGISに落とし、「災害」と「村まつり」と魅力」の2枚の記憶地図を

作成。11月24日開催の北海道民族学会で、記憶地図の効果や手法を発表した。また、災害の地図は防災マップとして谷地地区に配布する予定だ。

今回の研修でも一つ一つの大きな成果は、住民の人たちが活気のあった頃の村まつりを思い起こし、「また村まつりをやりたい」という意欲を呼び覚ましたこと。「来年は山車を引く若者20人を連れてきてほしい」と期待を込めて学生たちに話していた。

9月12日には完了報告会が行われ、各チームからそれぞれの成果が報告された。

路開拓の第一歩を踏み出すことができた。



スコティッシュサーモン販売促進チームが展示会でバイヤーの方々と商談

佐藤大輔ゼミの学生が参加した課題解決型長期インターンシップ「プロジェクト180(ワンエイティ)」。企業の現場で、学生たちは成長する。



丸水札幌中央水産の商品開発プロジェクトに配属された石澤恵奈さんのグループ

石澤恵奈さん(2年)のグループは、丸水札幌中央水産株式会社の商品開発プロジェクトに配属された。与えられた課題は、北海道ではなじみの薄い鰯(イワシ)や鰯(イワシ)の新しい食べ方、商品の提案。話し合いから始め、6月には企業の現場を見学、早朝の競りにも足を運んだ。そして、実際に食材を調理し、試行錯誤して誕生したのが「鰯瓶」だ。サイコロ

石澤さんは「コスト面や賞味期限など問題がたくさんあり、計画通りに進まない難しさがあった。でも、何もないところから商品をつくり上げ、達成感ややりがいを感じた。いろいろな人に出会えたことも大きな収穫」と研修の成果を語る。

三浦編子さん(2年)チームは、同社のスコティッシュサーモン販売促進チームに配属された。文字通り、展示商談会でいかに売り込むかが課題だ。

スコティッシュサーモンは完全養殖で北海道ではまだ流通していない。まずはマーケットリサーチや座談会を勉強。夏休みには毎日市場へ通い、天然・養殖15種類の鮭を食べ比べ、味の違いがわかるようになった。流通経路も学び、加工工場も見学。

「今、私たちのチームは、札幌で一番鮭に詳しいはず」と胸を張る。

「橋になりたい」と話した。

国際交流プログラム

海外研修で異文化体験

今年の夏、学生たちは海外で何を感じたのか

学生交換事業・夏期海外研修
カナダ・レスブリッジ大学
伝えること

経営学部経営情報学科1年

大橋りか

私は、夏休みにレスブリッジ大学に短期留学しました。到着して一週間ほどは、言葉の壁を感じて、自分から進んで会話をすることができませんでした。しかし、私が今回の留学で得たものは、自分から勇気を出して伝えることの大切さです。自分が何を伝えるのに文法は二の次で、一番大事なのは、自分なりに一生懸命伝えようとする心だと私は思います。三週間という短い時間でしたが、とても有意義なものとなりました。



現地学生とバッファロージャンプへ

私が今回の留学で得たものは、自分から勇気を出して伝えることの大切さです。自分が何を伝えるのに文法は二の次で、一番大事なのは、自分なりに一生懸命伝えようとする心だと私は思います。三週間という短い時間でしたが、とても有意義なものとなりました。

経営学部海外総合実習
カナダ・レスブリッジ大学
貴重な経験ばかりの三週間

経営学部経営学科2年

柏谷 優衣

私がこの海外総合実習に興味を持ったきっかけは、大學生のうちに海外に行く経験をした、という理由からでした。今まで海外経験がなかった私にとって、目に入るもの、耳で聞けるもの



入学初日の集合写真

私がこの海外総合実習に興味を持ったきっかけは、大學生のうちに海外に行く経験をした、という理由からでした。今まで海外経験がなかった私にとって、目に入るもの、耳で聞けるもの

人文学部 英米文化特別演習
カナダ・レスブリッジ大学
カナダでの多文化体験を通じて

人文学部 英米文化学科1年

静 萌夏

私は研修に参加して留学は語学のためだけではなく、視野を広げるチャンスでもあると感じました。カナダでは多文化主義を実感し、それぞれの個性を大切にしているように見えました。語学学校でもさまざまな国から来た人々がいましたが、どの国の人も勉強熱心でとても刺激を受けました。一緒に楽しい時間を過ごし、それぞれの国の言葉を教えることもしました。



トロント観光のときに研修仲間と

今回の経験で、英語力はもうろくに大切ですが、一番は相手に伝えたいという想いを感じました。そして、自分

学生交換事業・夏期海外研修
韓国・大田大学校

心に残った交流

法学部1年

原田 新

夏期3週間で終わった大田大学校での研修では、韓国語で行われる授業、さまざまな体験学習、大田大学の学生や先生方との交流がありました。韓国語の授業では、事前に行う韓国語の実力テストの結果を基にクラス分けをし、自分の知識に見合った授業を受けることができました。一日2コマの授業ですが、先生方が熱心かつ丁寧



韓服を着て記念撮影

い体験をすることができました。その中でも一番印象に残るのは、人との交流です。僕自身、今回初めての海外生活で、不安なことがたくさんありましたが、大田大学の学生や先生方が積極的に話しかけてくれたおかげで距離も縮まり、不安はなくなっていました。今回の研修は韓国語の勉強への意欲もこれまで以上に高まり、大学生活の中で良い刺激になった研修でした。

瞬間に感じられました。また、体験学習では韓国国内のミュージメント施設や映画館などに行ったり、1200年以上前の伝統家屋が集まった場所でも歴史を学ぶ体験もありました。現地に行くと、日本では体験できない濃

瞬間に感じられました。また、体験学習では韓国国内のミュージメント施設や映画館などに行ったり、1200年以上前の伝統家屋が集まった場所でも歴史を学ぶ体験もありました。現地に行くと、日本では体験できない濃

去る11月3日、海外協定校の一つである、中国・瀋陽市の遼寧大学日本研究所の招きで、法学部の樽見弘紀教授が「日本における非営利組織・企業・政府関係のこの20年を概観する」と題する基調講演を行った。

現在は遼寧大学の付属機関である「日本研究所」は、1964年に周恩来の命を受けて設立された遼寧省立の哲学研究所をその端緒とする。その後、いつかは閉鎖の憂き目にあつたが、周氏の「私がつくった、あの研究所はどうなったか？」一言で、当時の遼寧省の役人たちが慌てて体制を整え直した（日本研究所崔岩教授）のだという。その後、遼寧大学に付属され、今日に至るまで中国有数の日

遼寧大学・日本研究フォーラム

樽見法学部長が基調講演

本研究所のメッカであり続けた。2000年を前後して中国でもいったんは盛んになりかけたNGO/NPO研究も、その後の政府の方針転換などあって現在では下火となっている。フロアからの発言に対し、樽見教授は「日本では、例えば李妍姦リ・ヤンヤン駒澤大学教授など中国人研究者の意欲的な研究によって、日本よりむしろ先端をいく中国の市民社会の一端が明らかにされていることに言及した。

なお、本フォーラムは当初9月7日の開催を予定していたが、前日の未明に発生した北海道胆振東部地震の影響で、



眞ん中から右方向に、王所長、樽見教授、久保田晃日本領事館領事、崔教授

カナダ・レスブリッジ大から交換教員着任

学校法人北海学園とカナダ・レスブリッジ大学との交流協定に基づき、平成30年度後期の交換教員としてポール・ヘイズ教授が9月11日、本学に着任した。文理学部所属のポール教授は、本学の「カナダの自然と社会Ⅱ」を担当。カナダの自然、社会、文化などの多分野から北海道とカナダを比較研究していく。任期は12月20日まで。



ポール・ヘイズ教授(前列中央)とご家族の学長主催歓迎会にて

浅羽祭挙行

平成30年度浅羽祭が10月22日、本学4号館第3会議室において厳粛に執り行われた。浅羽祭は、北海学園創立の功労者である浅羽靖先生(1954~1994)のご命日に毎年行われる行事。浅羽先生をはじめ物故された北海学園教職員、学生・生徒のご冥福をお祈りした。



出席したご遺族および関係者



自著を語る 法学部教授 本田 宏

昨年7月に刊行した本書は北海道大学の大学院生時代からの研究の集大成です。当初は環境問題全般やNGO、ヨーロッパ政治に関心がありました。でも環境政治学は未開拓の分野だったので試行錯誤の連続でした。

修士課程ではドイツ緑の党の政権参加について研究しました。緑の党は環境や平和、女性やLGBTの人権、また近年は難民・移民との共生を重視している政党です。

ドイツに学ぶ脱原発の政治過程

を参照しながら手探りで研究しました。留学中は、アムステルダムに本部のある国際環境団体グリーンピースのついでベルギーや英仏の農地や住宅、自然を汚染し、故郷を奪い、健康を脅かします。東京電力と東芝という日本の二大企業も原発事故の結果、事実上の破綻に追い込まれました。ドイツの脱原発の政治から学ぶことは多いと思います。



『参加と交渉の政治学』ドイツが脱原発を決めるまで 法政大学出版局 2017年

博士課程進学後はオランダに留学し、社会運動論を学ぶ中で原発問題の重要性を認識しました。しかし原発問題に関しては日本の政治学者による研究は皆無で、論文は日本とドイツの原発をめぐる政治と社会運動について書き、このうち日本



サンタクロースが登場する紙芝居は学生たちのアイデア。多くの子どもたちが見入っていた

クリスマス物語

サッポロファクトリー X'mas ツリー点灯式で「サンタランド」イベント実施

11月3日、サッポロファクトリーで行われたクリスマスツリー点灯式に合わせて、経営学部・佐藤大輔ゼミが「サンタランド」イベントを行った。

これは、2016年度から十勝管内広尾町と連携して佐藤ゼミが取り組んでいる地域活性化プロジェクト。点灯式に使われるクリスマスツリーは広尾町から毎年贈呈されているもので、そのつなかりを生かし、ブースを構えて、子ども向けの紙芝居や、子ども向けの型取り組みを展開しようとして、昨年「サンタランド」イベントを実施している。

広尾町の地域活性化に向けて

けの紙芝居や、地元広尾高校生による物販などを行った。会場は、小さなお子様連れなど多くの方々が来場した。広尾町はノルウェー本国より正式に認められたサンタランド(サンタクロースの聖地だがその関連事業も現在は下火に。佐藤ゼミでは、クリスマス時期にサンタクロースからの手紙が届く「サンタメール」事業の復興をめざして、地域での聞き取り調査や各種データ分析。改めて新しく市場を構築するためのプッシュ型の取り組みを展開しようとして、昨年「サンタランド」イベントを実施している。

このプロジェクトの目標は、学生がアイデアと見本例を作り、最終的には地域の人たち自身が展開できるようにすること。今後は、町民にうまくバトナタッチできるよう働きかけていく。

▼11月2日 ウラチ
ミル大会教授バ
ツイレノヴァター
ワ氏、一般社団法
人全日本ミニバ
レ協会会長 北海道フ
ロック北海道ミニバ
レ協会専務理事 帆
幌ミニバレ協会会
長 佐藤勝美氏、ロシ
ア語通訳・翻訳 通訳
案内士 鶴田和子氏
▼11月7日 小説家川澄卓氏(北海道庁卒業生)

左から、寺田吉孝ロシア協定校専門
員長、バツイレノヴァターマール氏、
酸水長、佐藤勝美氏、鶴田和子氏